

「救いは主にある」 詩篇3篇 平吹光太 24.8.25

本日の箇所のだビデは絶体絶命の窮地に追い込まれていたが、神に助けられるという確信を持っていた。なぜだビデはその確信を持ち歩むことができたのかを共に教えられていきたい。

文脈：表題に「だビデがその子アブサロムから逃れたときに」とある。だビデ王は愛し育てた息子のアブサロムに反乱を起こされ、エルサレムから逃げざるを得なくなった。なぜアブサロムは父に逆らい反乱を起こしたのか？それはアブサロムの妹であるタマルが異母兄弟アムノンに犯された時、王であり父であるだビデはアムノンを戒めなかった。なぜならだビデはバテ・シェバとの不倫の罪を過去に犯していたため、戒められなかった。その結果、アブサロムはアムノンを殺し、アムノンを戒めることができなかっただビデに対して怒りを燃やす。そしてアブサロムはだビデ王の悪い噂を流し、イスラエルの民を自分の味方につけ、だビデの助言者アヒトフェルや多くの民がだビデ王に謀反を起こすように仕向けた。その謀反を企てていることをだビデは聞き、エルサレムに居られず逃げた。だビデに入ってくる情報が今まで自分に付き従っていた家臣たちが次々とアブサロムに寝返っているということ。だビデは今まで味方であった息子アブサロムをはじめ、家臣達や多くの民が自分の命を狙う敵へと変わっていったが、そのような絶対絶命の窮地の中でも神を讃美している。それがこの詩篇3篇。なぜだビデが隣人から見放されて苦しい窮地の中でもだビデは神の守りを確信し、救いを願い求められたのかを見ていきたい。

I. ありのままの今の苦しい状況、状態の重荷を神の前に持っていく

「主よなんと私の敵が多くなり私に向かい立つ者が多くいることでしょう。多くの者が私のたましいのことを言っています。『彼には神の救いがない』と。」(1-2)

アブサロムによって謀反が引き起こされ、だビデは今まで味方で信頼していた者達が次々と敵となり、その数は幾万にもなった。そのような状況を見て、周りの者達はだビデが神から見捨てられたと考えていたため、「多くの者が私のたましいのことを言っています。『彼には救いがない』と。』」と言っている。

「私の敵」とは、原語では他に「精神的圧力、困難、狭い」の意味がある。だビデは大勢の敵に命を狙われていたため、八方ふさがりで、敵から見つからない暗く狭い場所に追い込まれ、隠れざるを得ない状況を述べている。だビデは今まで信頼していた者たちに裏切られ、どれ程、辛く、全ての人々が敵に思えるような人間不信の状態に追い込まれていたか。

だビデは八方ふさがりの状況の中でも自分だけで解決しようとはせず、ありのままの状態「本当に辛い、苦しい。自分ではどうすることもできない」ことを正直に神に祈っている。誰も信用できず、辛くて、苦しくて、どうしたら良いかも分からない時、唯一裏切らず、「重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイ11:28)と言われる主の前に進み行き、だビデのようにありのまま状態を打ち明けましょう。神は必ず、その祈りに答えてくださる。

II. 窮地に追い詰められる時に分かる恵み

「しかし主よあなたこそ私の周りを囲む盾私の栄光私の頭を上げる方。私は声をあげて主を呼び求める。すると主はその聖なる山から私に答えてくださる。私は身を横たえて眠りまた目を覚ます。主が私を支えてくださるから。私は幾万の民をも恐れない。彼らが私を取り囲もうとも。主よ立ち上がってください。私の神よお救いください。あなたは私のすべての敵の頬を打ち悪しき者の歯を砕いてくださいます。」(3-7)

ありのままの状態を主に打ち明けただビデは「しかし」と一転して主に全信頼を置いていく。

「盾」とは防御の武具で鋭い矢や剣をとどめるのが盾の役割。誰かが窮地に陥った時に他の誰

かが助けるなら、その人も非難の矢面に立たされる。それは盾になってくれたことになる。ダビデに向かってくる数えきれない弓矢が飛んで来て「もうだめだと」頭を抱えることがあっても矢は当たらない。なぜなら、神が盾となり体を張り命をかけて守ってくださるから。

「頭を上げる」とは法廷用語で、ひざまずいている被告が判事によって頭を上げられることで「解放」の表現とされていた。つまり名誉の回復。何年、何十年も冤罪で捕まっていた人が無実であることを言い渡され、悪人という肩書きから元通りにさせられるということ。ダビデが悪人扱いされ、窮地に追い込まれた状況の中でも、主は「私の頭を上げる方」＝私の名誉を回復される方と告白できた。それはダビデが、主だけしかこの状況を変えることはできないという信仰を持ち続けていたから。

「私は身を横たえて眠りまた目を覚ます。主が私を支えてくださるから。私は幾万の民をも恐れない。彼らが私を取り囲もうとも。」とあるが、いつ命を取られるか分からない状況の中で、横になって眠ることはできるか。しかしダビデが命を狙われている状況の中、平安に眠ることができたのは「主が私を支えてくださる」という信仰に立っていたから。私たちが窮地に追い込まれた時にこそ主に信頼しましょう。絶対絶命と思えるピンチの時こそ、問題を見つめるのではなく神を見上げたい。そうであれば、自分に幾万もの矢が襲ってきても、神が盾となって全ての矢をその身に受けてくださったのだということを知る。私たちが主に頼り、信仰を持っていつも平安の中で歩ませて頂きましょう。

III. 「救いは主にある」

「救いは主にあります。あなたの民にあなたの祝福がありますように。」(8節)

「救いは主にあります」の「救い」の原語には、「解放、広い」という意味がある。「私の敵」(1)の言葉に「精神的圧力、困難、狭い」といった意味があり、1節では敵に囲まれて追い込まれ、狭く、苦しく、今にも押し潰されてしまいそうであった。しかしその追い込まれ、どうしようもできないような狭い(苦しい)ところから解放され、主の御元で広い(平安の)中に導かれること、それが救い。

そして8節は2節の「彼には神の救いがない」の「救いがない」と対比されている。2節でダビデは人々から「神に頼っても無駄だ。見捨てられたんだ」と言われたが、ダビデは「救いは主にあります」と、はっきり断言をしている。なぜか？それはダビデが神に頼り、神と共に歩む者には救いがあることを経験し、日々積み重ねてきた信仰の姿勢にある。

少年の時のダビデが、巨人ゴリアテと戦った時も周りからは勝てるはずがないと思われていた。しかしダビデはゴリアテに完全勝利した。なぜか？それは彼が羊飼いの時から、どこからくるか分からない獅子や熊から羊を守るためにどのように戦い、守るのかを日々訓練していたから。少年であったダビデが獅子や熊、さらにはゴリアテに勝てるはずがないと思う。しかしそれが可能であったのは神と共に歩み、神に信頼することを日々積み重ねてきたから成せた。自分は何もせずに、神がしてくれるから、自分は好きなことをやっていれば良いということではありません。そうではなく、日々、神と共に歩み、信頼すること。つまり日々みことば(神の私たちへのメッセージ、御思い、御心)に聞き、神に祈り、主に信頼し、主の御心を歩んでいくということ。その積み重ねがあるかないかで、大きな苦難にあった時に、簡単に打ち倒されてしまうか、それともダビデのように、「救いは主にあります」と神を信頼して歩むのなら、圧力で潰されることなく、恐れや不安から解放され、主の平安へと導かれる。どんな時も主を信頼し主と共に歩んでまいりましょう。